

草野貝塚発掘報告

河 口 貞 徳

遺 蹟

遺蹟は鹿児島県谷山町草野賀呂、西川精二氏畑地内にある。

薩摩半島中央部を金峰山脈が低山性若しくは丘陵性の地貌をなして走っている。この山脈は西部に向っては寛傾斜を以て次第に低くなっているが、東部鹿児島湾に向っては急傾斜を以て下り、海岸線に於ては断崖をなして海に入っている所が多く断層線の存在を示している。このため東部においては平野が少く、甲突川、永田川等の下流に小平地を形成しているにすぎない。

鹿児島県にはシラスと呼ばれる洪積期の火山灰堆積層が広く分布し、風水による浸蝕が甚だしく、台風による被害を大ならしめているが、永田川平地の南に接してこのシラスの台地が広がっている。坂上部落から五位野に至る南北約4km、東西約2kmの台地がそれである。

標高80mから40mを示すこの台地は、海岸線に於て急崖をなしている。

シラスは透水性であるために、地下水位が低く台地上の聚落も水に支配されて、山麓線か、台地が浸蝕されて出来た谷の近くの泉水の利用出来る場所に立地している。第一図の聚落の分布状況はそれを示している。

先史時代も同様、その生活は水に支配されたのであって、遺蹟の分布は現在の聚落の分布と一致している。即ち、縄文式遺蹟としては、草野の他に五位野、光山等があげられ、弥生式の遺跡としては影原、水樽、坂ノ上などがある。

草野の遺蹟はセツ島に向って開いた谷の南斜面で台地面から10m下った傾斜地に出来た貝塚であって標高30mを示している。

調査経過

同遺蹟は、昭和23年頃、地主、西川氏が所有松林を開墾した際に多量の貝殻、獣骨等が出土して耕作に障害となるので、近くの谷に棄て去り、階段状の畑地とした。この時遺蹟の一部は破壊されたのである。

昭和26年谷山町考古学同好会員、有山流石氏は貝殻出土の報を得て調査の結果、貝塚であることを確認し、同年6月9日より13日まで谷山町考古学同好会主催のもとに、河野治雄氏が責任者として試掘し、筆者もこれに手伝い、11日には筆者自身層位確認のため試掘をこころみた。

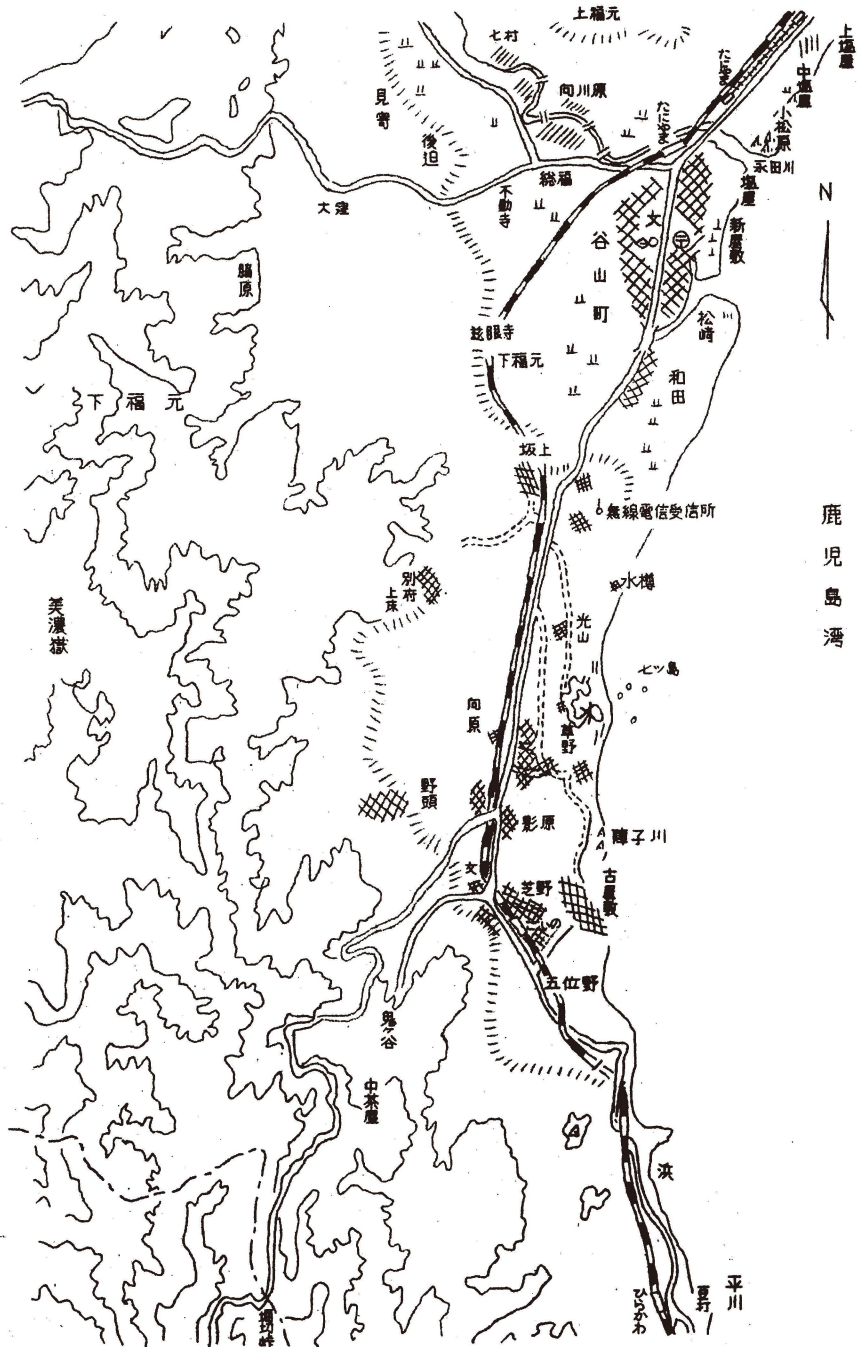
この試掘については河野氏の概報がプリントとして配布されている。

同年7月9日より1週間の予定で発掘をこころみたが、雨天のため中止し、同月20日から31日まで12日間の発掘を行なった。

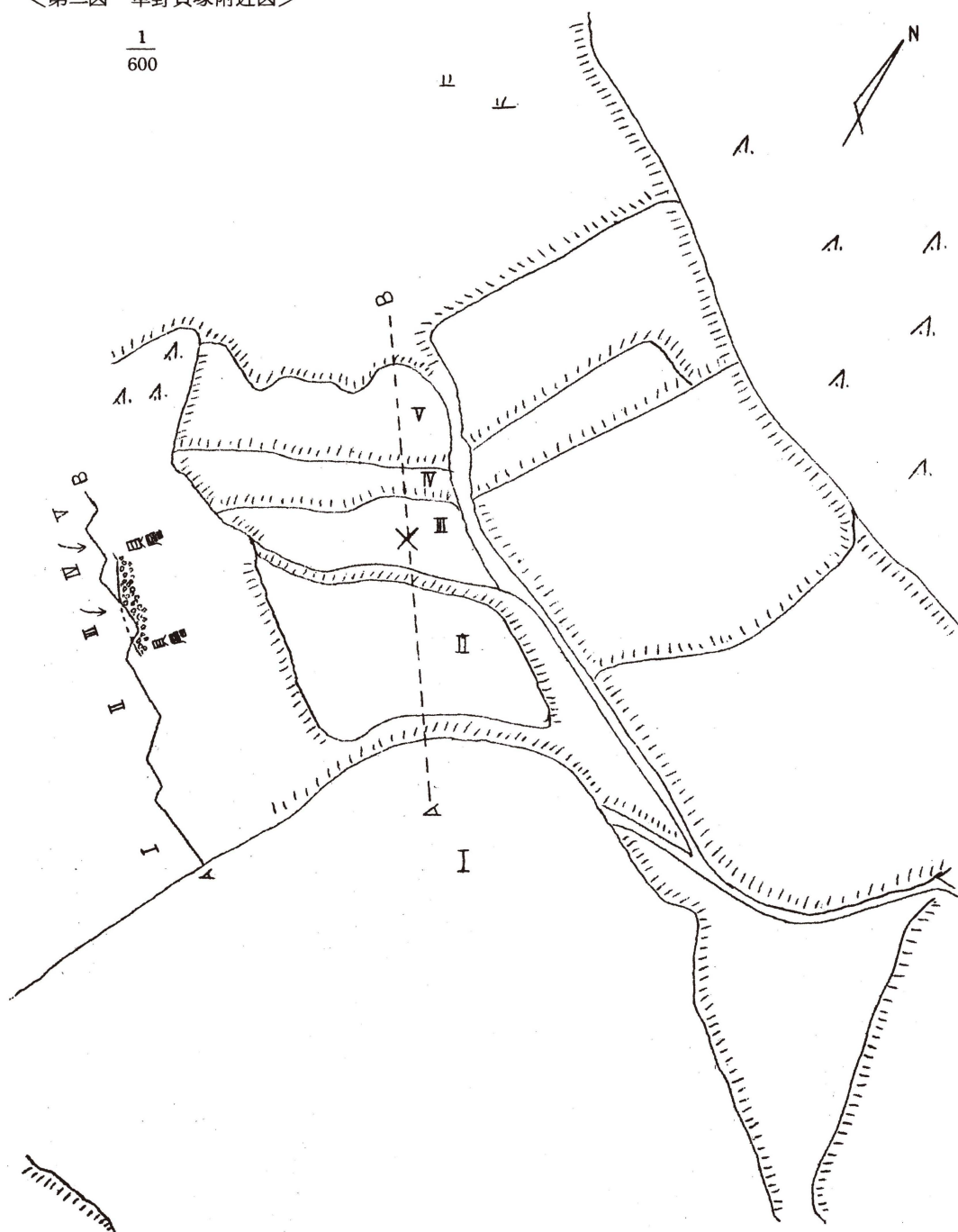
三友国五郎、原口正三、河野治雄、盛園尚孝、折田直実の諸氏及び谷山中学生、玉竜高校生

諸君の御協力と寺師見国先生の御援助を得たことをここに感謝する。特に河野氏と谷山町考古学同好会の御援助に対し深謝の意を表するものである。

〈第一図 草野貝塚附近地形図〉



<第二図 草野貝塚附近図>

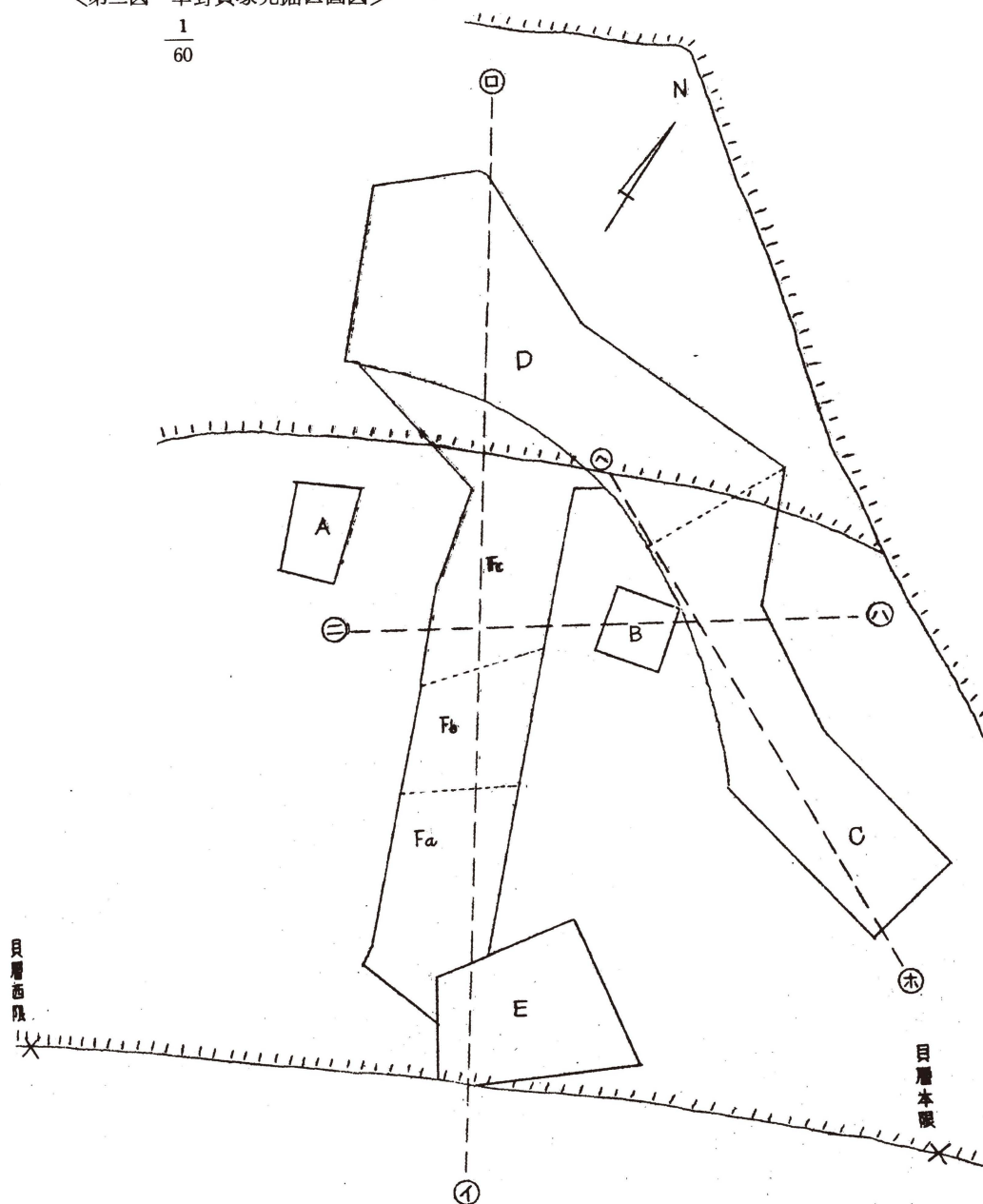
 $\frac{1}{600}$ 

発掘状況

貝塚は平坦な台地面から数えて三段目の第二図Ⅲの階段状に開墾された畑に露出し、二段目の畑の下部及び四段目の畑、第二図Ⅳに及んでいる。

＜第三図 草野貝塚発掘区画図＞

$\frac{1}{60}$



現在露出面東西8 m、南北6 mの広がり有しており、貝層面は東南より西北に向かい約30度の傾斜をなして下り、貝層下底部においては約10度の傾斜をもって下降している。

第二図Ⅲの畑に於て、A・B・Cの3地点に於て、ボーリングを試みC地点に於て貝層に達したので貝塚の縁辺部をたしかめるべく四段目の畑第二図Ⅳへトレンチを延ばし、これをD区とした。

層位関係を明らかにするためにD区から前回の試掘地点Fa区へむかって、トレンチを延ばし、これをF区とし、さらにこれをFb区Fc区に小分けした。

貝塚堆積以前の原地形は東南より西北に向って約10度の傾斜をもって下り、Fc区とD区との境界即ち上より三段目の畑、第二図Ⅲと四段目第二図Ⅳとの境目のあたりに北東—南西に向かい傾斜して浸蝕による巾1 m、深さ50 cmの溝が横断しており、貝塚はこの部分で切れさらに溝より北側に極少量の貝の堆積を示している。

此の溝の部分は水分を含んだ粘質の土壌が堆積し、土器が最も多量に出土している。このことは上方より遺棄した土器等の遺物が転落してこの部分に止まり、又雨水によって洗い流された粘質土壌が堆積したことを示すものである。

層位はF区に於て最も明瞭に現れている。地表に於て開墾のため少々削り取られている部分もあるが、Fb区Fc区に於いては完全に残されていた。

貝層はFb区では厚さ1.6 mを示し、Fc区に及んで漸次薄くなっている。この層はさらに土を混じた層と純貝層とが互層をなして5つの層位を数えることが出来る。

貝層下は赤土が40 cmの層をなし、さらにこの下に薄い貝層を夾んで80 cmの赤土の層があり、最下に又薄い貝層があって基盤のシラス層に続くのである。

層位関係の資料としてはC区に於ても二層の貝層が認められ、又D区に於ても大体上下の層位をわかつことが出来るが、F区の資料が最も適当であるのでこれを使用し、D区及びC区の資料はこれを補う意味に於て使用した。

遺 物

自然遺物

自然遺物としては獣骨、魚骨、貝殻等がある。獣骨では鹿、猪等の他に犬大の小動物の骨もある。獣骨、魚骨、鳥骨等については、同定を依頼中であるので、ここにははぶきたい。

貝の種類を挙げると、てんぐにし、ひあふぎ、ばいうみぎく、あさり、かがみがい、はまぐり、はかがい、あこやがい、すがい、もくはちあふい、やまたにし、えがい、きくざるがい、つめたがい、ひめあさり、月日がい、大鳥貝、ろーそくいもがい、へびがい、へなたり、あまおぶね、こしたかがんがら、いぼれいしだまし、竹の子かわにな、おきしまきせる等である。

人工遺物

骨角貝製品

この遺蹟においては貝輪の完全なものではなく、破片のみ少量出土した。南九州の遺蹟には出土例の少い骨角器が少量出土した。第五図9は歯牙に孔をあけた装飾品であり、10はきざみを入れ、一端をといた角製品である。11は骨に加工したもので、これも一端に孔を穿ってつるようになっている。装飾品であろう。13,14は角製品で簪である。

石器

磨製石斧・磨製薄石板・軽石製輪石等が出土している。磨製石斧は三味線胴である。軽石製品は地方の特性を表わすもので、第五図2及び3は孔に、紐を通してつるしたひもづれの跡を残しており、或は簡単な飾りか呪符として使用したものかもしれない。

磨製の薄い板状の石器は注意すべきもので、類品は市来川上貝塚田布施大野遺蹟等同形式の土器を出土する遺蹟に見られる。第五図4は完全品で巾3cm、長さ6.6cm、厚さ6mmの磨製石器で、一端に両刃をつけ他端に近くえぐりを入れている。類品の少ないものである。

土器

土器の形式

土器には第一、従来市来式と呼ばれたものと、第二、指宿式と呼ばれたものと、第三、そのいずれにも属しない一群の土器の三種類がある。

◇第一の土器（市来式）

第一の土器は市来川上貝塚の土器を標式とする市来式土器で、器形は深鉢型平底で底面は縄代底のものもある。口縁が肥厚して文様帯を形成し、その断面は三角形をなし、文様は貝殻文、爪形文、平行沈線文、刺突文等を施している。

口縁部に山形の隆起のあるもの、第六図。と水平口縁のもの第七図。とがある。仮りに前者をAとし、後者をBと呼ぶことにする。

市来式は平底のみが知られていたが、この遺蹟においては器台付の揚底鉢形の完全土器が二箇出土した。第六図3、第七図4、又日置郡田布施村大野も市来式を主体とする遺蹟であるが器台付皿形土器が出土しているが、この遺蹟においても器台付皿形土器が出土していて、市来式には台付皿形土器が一般的に伴うものであることが認められる。第九図1。

第八図2は器台と思われるものであるが破片であるので断定することが出来ない。

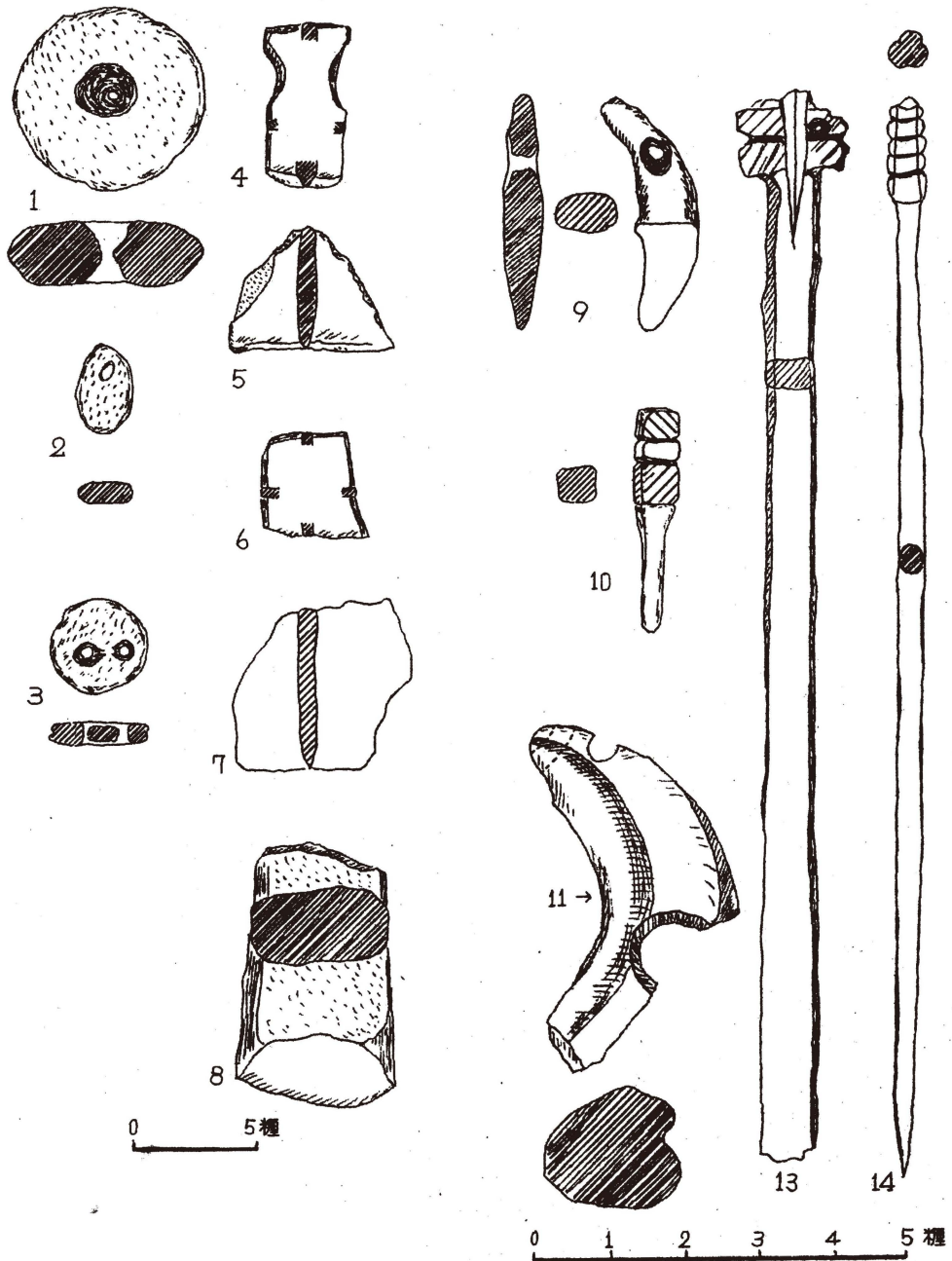
皿型土器をI、器台？をJと仮称する。

◇第二の土器（指宿式）

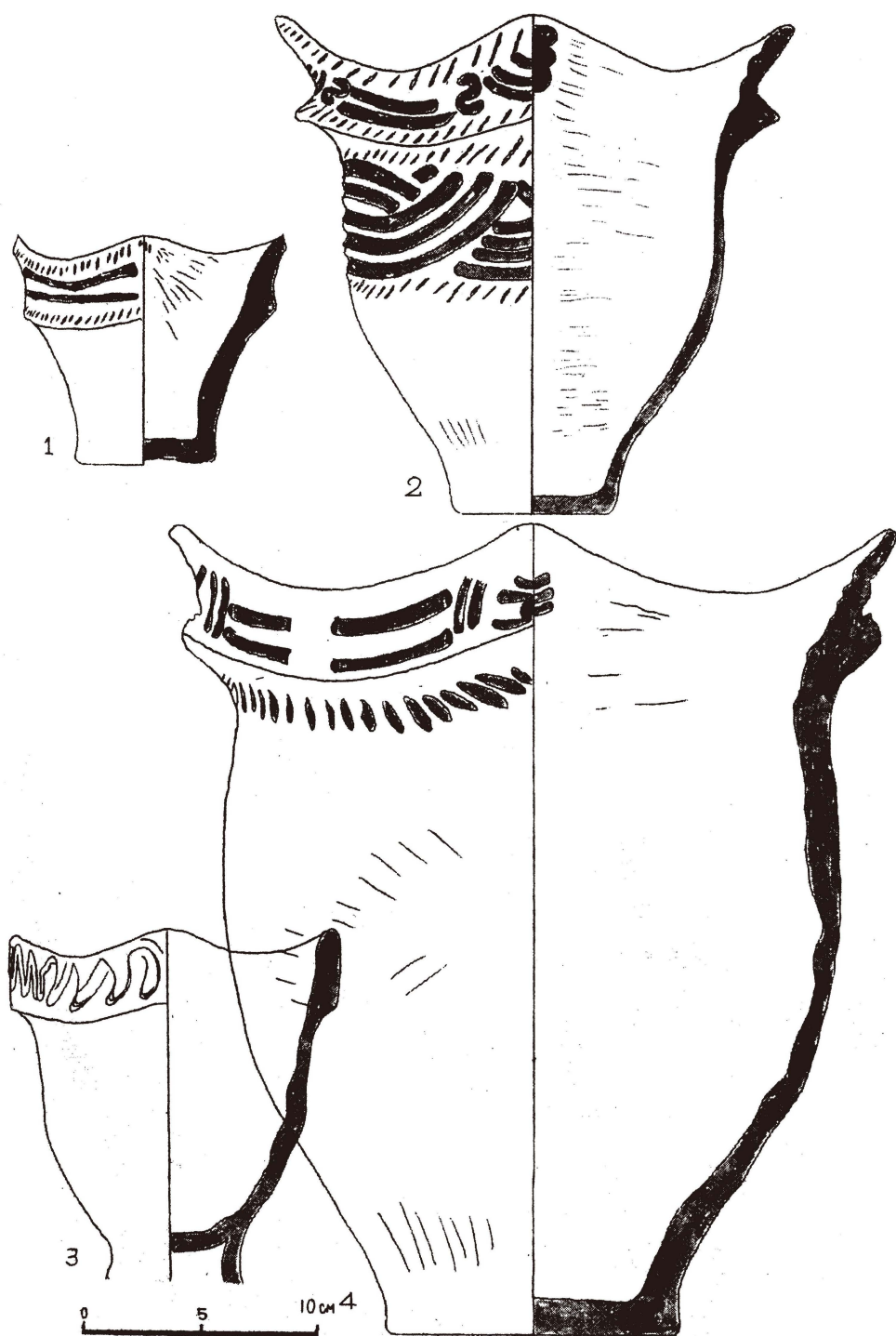
指宿式土器は深鉢形が多く、口縁は少々外曲したものが多く、又山形隆起を有している。腹部は稍膨みを有するもの多く、底部は平底である。文様は腹部の中央を越えているものもある。二条の平行曲線文で、或は紐状に、或は巻鬚状に応用している。

この遺蹟においては出土の量少く、主体をなしていない。仮にLと名付ける。

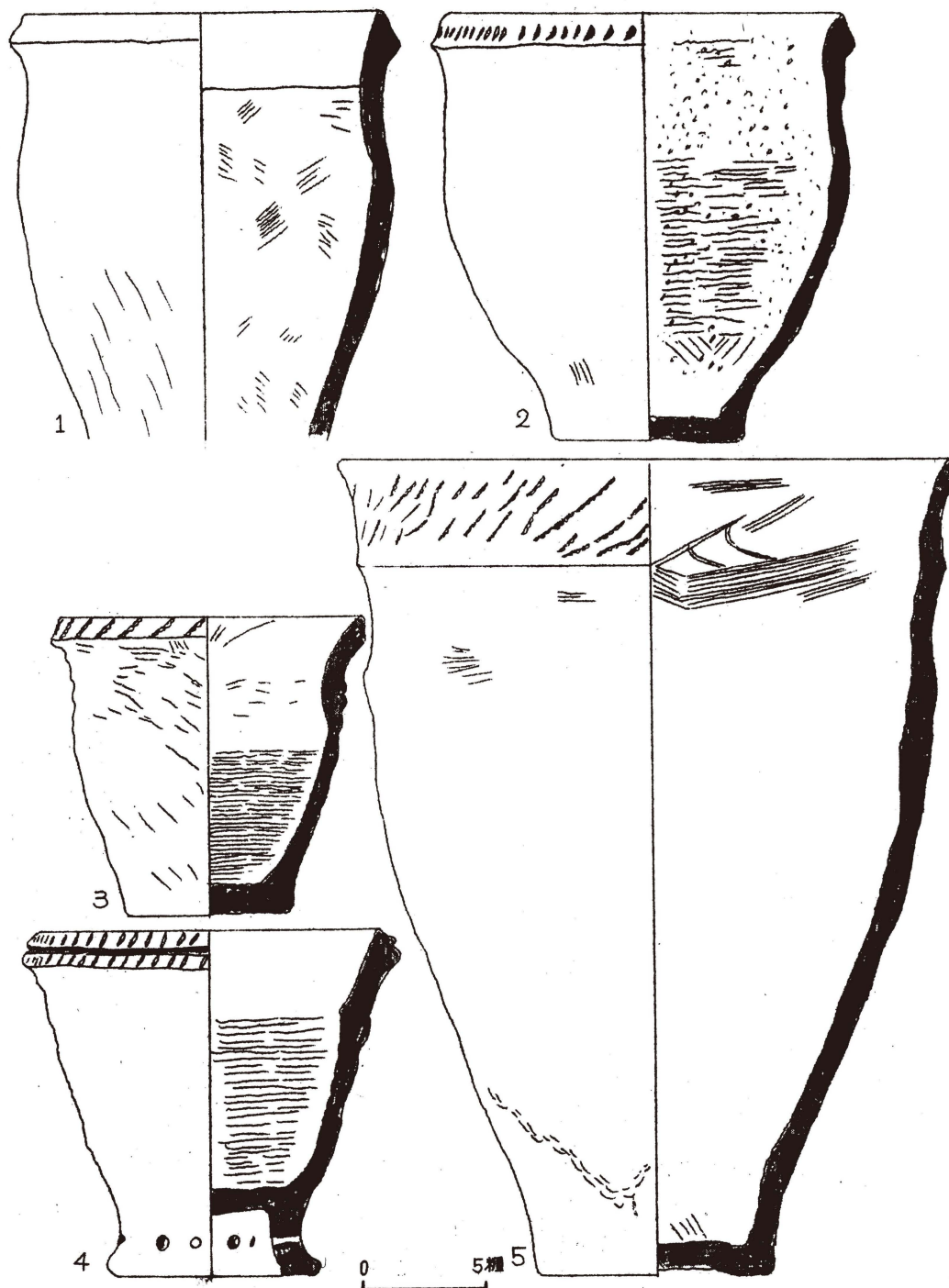
<第五図>



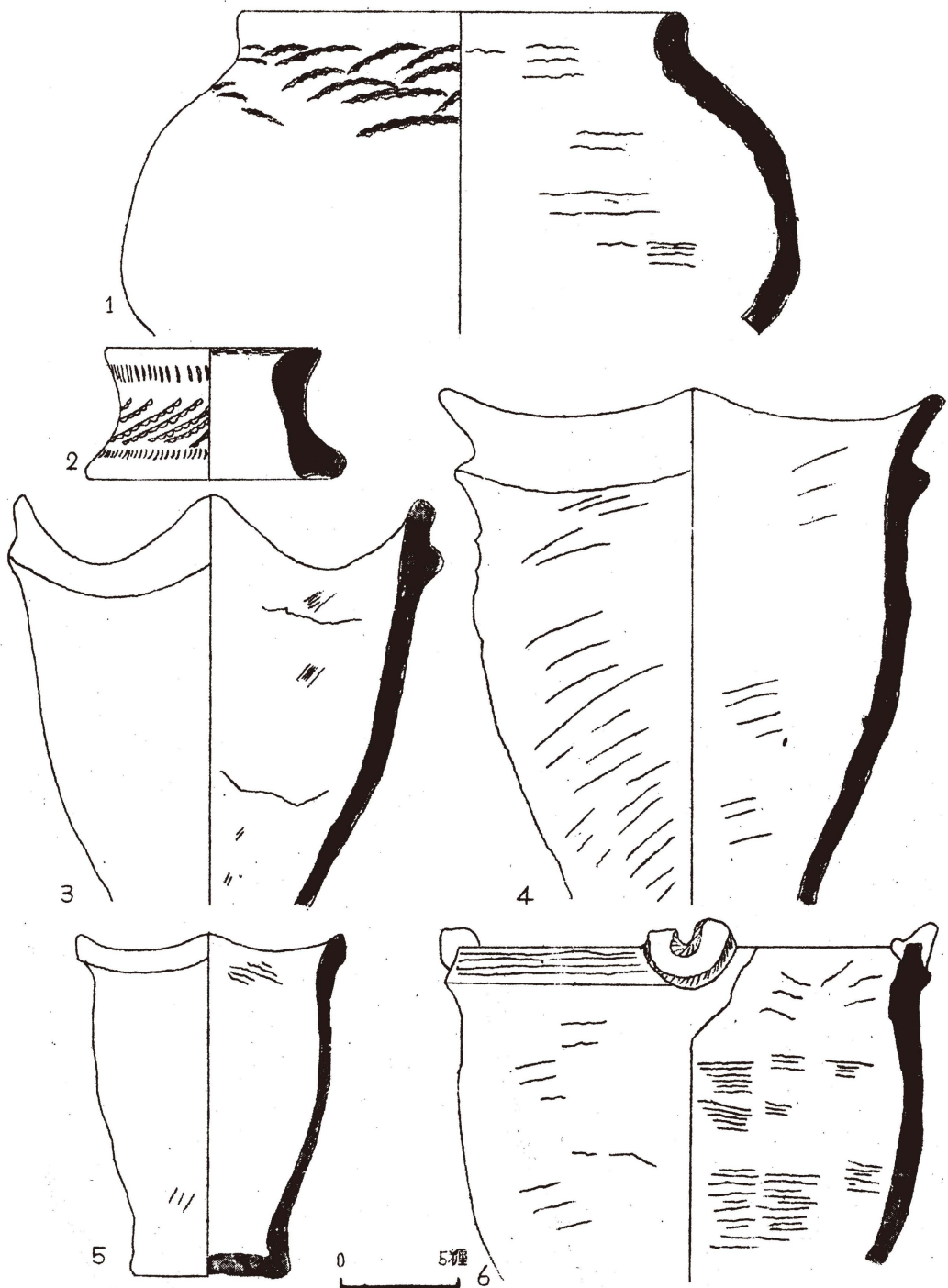
<第六図>



<第七図>



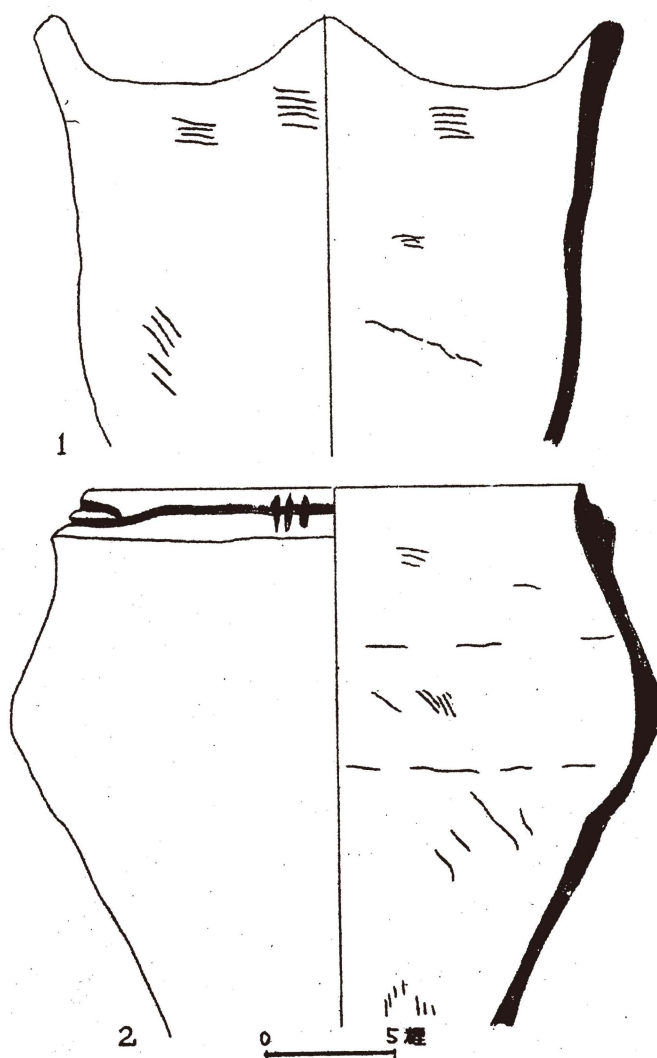
<第八図>



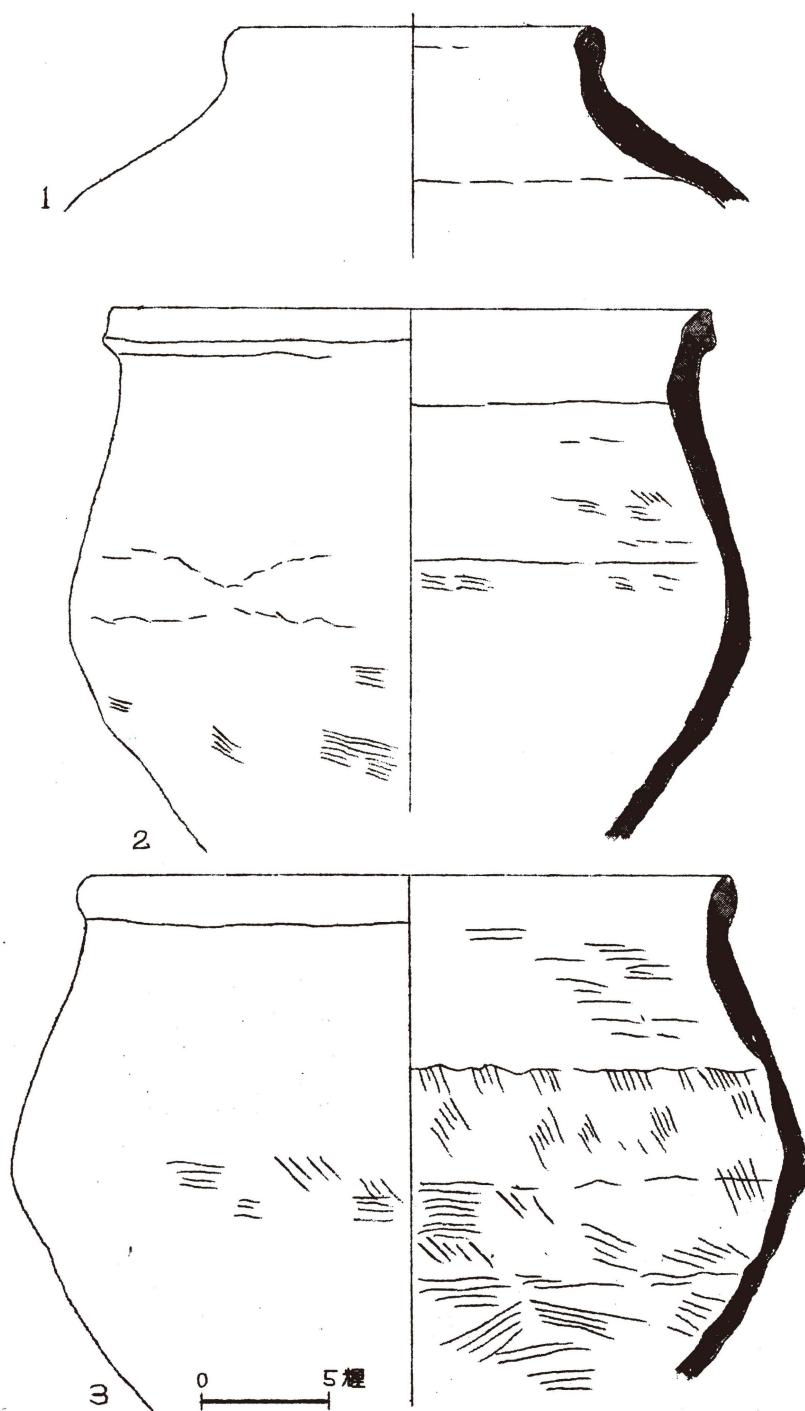
<第九図>



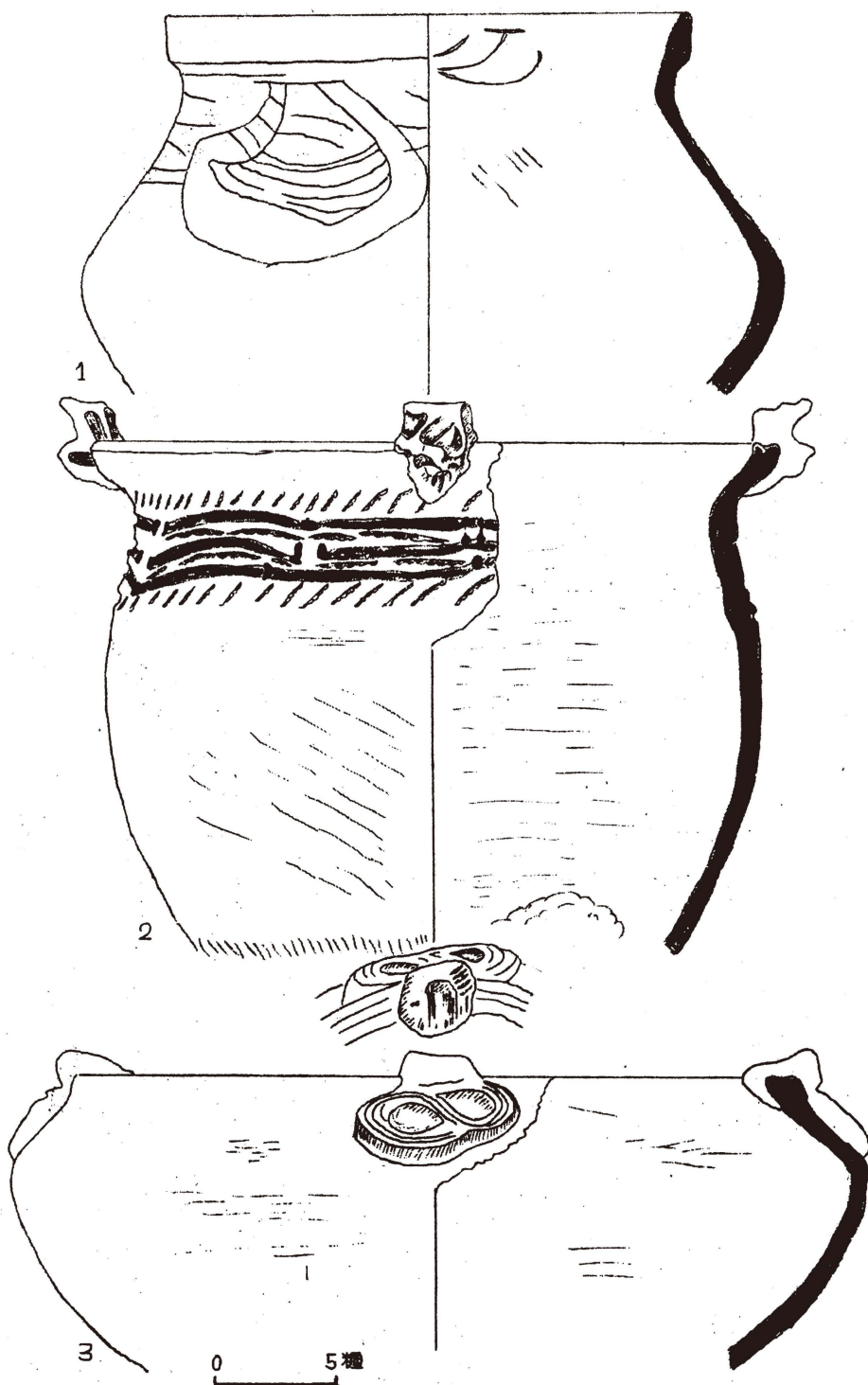
<第十図>



〈第十一図〉



<第十二図>



◇第三の土器

第三の土器は市来式と指宿式とをのぞいて後に残ったものであって、第九図4,5,6,7,8,9,10のごとく、口縁部が外反し、頸部がしまり胴部の張った甕形土器Cで、これには貝殻文のあるものと、素文のものとあり、貝殻による条痕をつけたものが多い。

第十図1のごとき山形隆起を有し、素文で市来式のように口縁部断面が三角形をなしていないもの、D、第九図2,3のごとき鉢形素文土器E、第十図2,3のように口縁部が縮められ、頸部がややしまり、胴部に於て著しく張り出し急に底部へしまり、素文が多いものF。

第十一図1のごとき赭褐色の壺形土器G。

第十二図2のごとき、前記Cの器形に胴部に及ぶ凹線文、貝殻文、篋書文等を施し、口縁部に4箇の把手を付した土器H。等の一群をなしており、これ等は素文土器が多く、又器面を貝殻条痕を付して調整したものも相当ある。

◇層位と土器形式

前述の三群の土器は層位的にも明瞭にその占める位置を異にしている。即ち第二群指宿式Lは最下第九層貝層中に単独に出土し、ここでは他の二群の土器の出土がない。第一表は最上第一層から第五層までの各層について土器形式と層位の関係を示したものであるが、これによると指宿式Lは、Ⅲ層以下に出土し、その量に於てV層が最大で58%を占め、Ⅳ層Ⅲ層とその数量を減じ、Ⅱ層以上には出土していない。

第一群市来式(A・B)を見ると、V層よりⅠ層まで各層に出土しており、V層Ⅳ層では出土量少く、Ⅲ層では急増しⅡ層では稍減じているが、Ⅰ層では又増加している。

第三群の土器(CDEFGH)はⅢ層以上に於て出土し、Ⅱ層Ⅰ層と数量を増加している。

第一群の市来式が各層に出土しているのに対し、第二群の指宿式は下層にのみ出土し、第三群の土器は上層にのみ出土している。数量の上から見ると第二群の指宿式と第三群の土器とは共に少く、第一群の市来式が最も多く、この遺蹟の主体をなしている。

層位関係を他の遺蹟についてみると、市来川上貝塚、鹿児島市西別府木ヶ暮遺蹟、桜島武貝塚等に於て市来式が上層に出土し、指宿式が下層に出土して、草野貝塚と同様な関係を示している。

京都大学の武貝塚発掘の結果によると、市来式は上層に於ては西平式を伴出し、下層に於ては鐘崎式を伴出したとのことである。この遺蹟に於ても鐘崎式を少量伴出しており、田布施大野遺蹟、吉野石郷遺蹟に於ても西平式、鐘崎式との共存関係を示している。又鹿児島市池之上町若宮遺蹟は西平式を主体とする遺蹟であるが、逆に市来式を伴出しているのである。

西平式、鐘崎式は北九州に於て広く分布している縄文土器であって、鐘崎式から西平式へ推移したものであることが形式的に明らかであるが、市来式がこれ等の土器を伴出することは、市来式に新旧の二形式が存在することを示唆するものである。

形式の推移

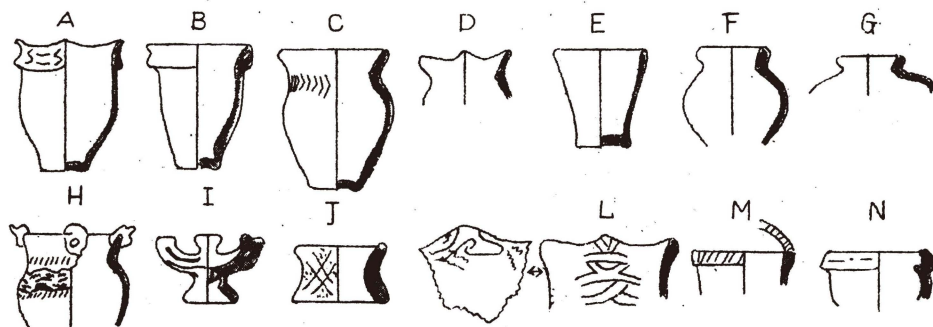
層位的に指宿式と市来式とは下層と上層との関係を有し、Ⅹ層に於ては指宿式のみを出土するが、ⅤⅣⅢ層においては共存関係を有している。

形式の上から両者を見ると、市来式は貝殻文を主とし、爪形文、平行沈線文、刺突文等を附し、口縁部断面が三角形で器面に貝殻条痕を有するのが特徴である。

これに対し指宿式は口縁部の肥厚なく、平行曲線文を施し、草野貝塚の土器にあっては貝殻条痕を有しない。

両形式は共に南九州に分布する地方的特色の強い土器で、両者の分布は一致する遺蹟も多いが、市来式が沿海地方に限られて分布しているのに対して指宿式は加久藤、中霧島、村古江等の奥地にも分布していてその差異性を示している。第十三図。

＜草野貝塚土器型式図＞

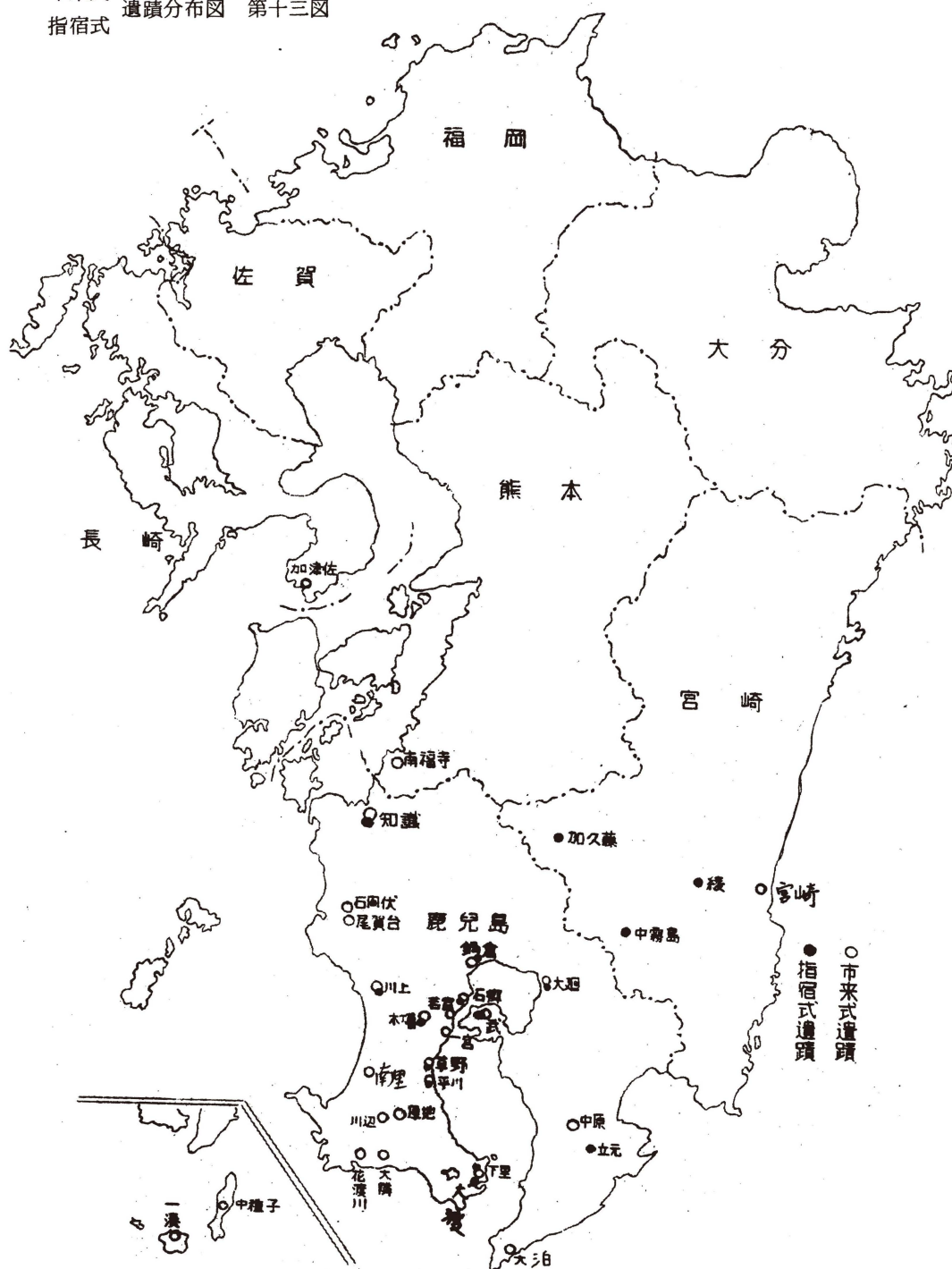


＜層位と土器形式との関係＞

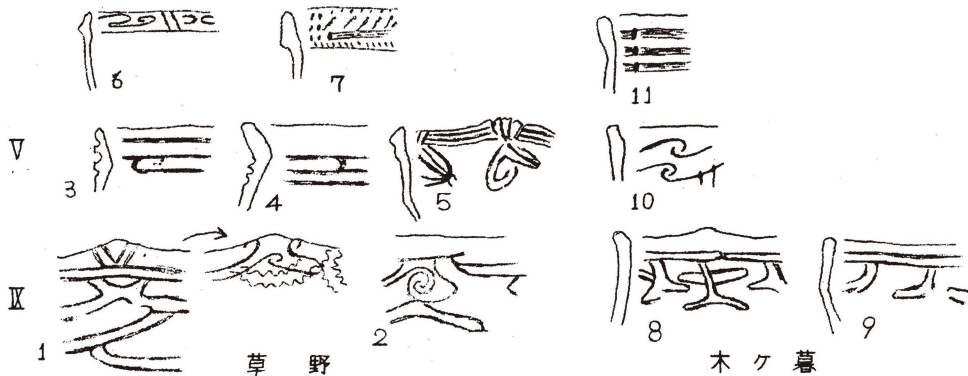
形式 層位	A	B	C	D	E	H	G	M	I	L	J	N	無文	貝殻 条痕	条痕な きもの
Ⅰ 数	44	27	12	9		1	6	1	1				18	4	3
Ⅰ %	61.9	27	9.23	9.0		5.0	10.0	5.0	10.0				36	3.4	4
Ⅱ 数	10	11	1	1				1					24	30	28
Ⅱ %	14	11	7.6	1.0				5.0					48	25.8	37.3
Ⅲ 数	10	35			1	1				2	2		8	56	25
Ⅲ %	14	35			10.0	5.0				16.6	33.3		16	48.2	33.3
Ⅳ 数	4	13								3	2		0	12	7
Ⅳ %	5.6	13								25	33.3		0	10.3	9.4
Ⅴ 数	3	14								7	2	1	0	14	12
Ⅴ %	4.4	14								58.3	33.3	10.0	0	12	16

註 この層以下に紅褐色土をはさんで二層の薄き貝層ありその内最下貝層はL即ち指宿式のみを含む。

市来式
指宿式



<第十四図>



両者はこの様に種々の点に於て差異を有しているが、市来式が指宿式と接触して如何なる影響を受けたかというに、指宿式は末期に於てそれ自体文様の単純化を来し、平行曲線文は、平行線文となり、結節点や渦文部は爪形或は点として残る様になった。第十四図 3. 4。

同様の現象はその他遺跡に於ても見られるのであって、木ヶ暮遺蹟に於ても同様である。第十四図 11。

この様に結節点や渦文部の変形である点又は爪形と、点又は爪形から始まる平行線文は、市来式に残って行つて、最も普遍的な市来式の文様として行なわれたのである。第十四図 7。

又一面に於いては、市来式の特徴たる断面が三角形を呈する口縁部を有する土器に指宿式の文様である平行曲線文を施したものが出来て来ている。第十四図 5, 6。

このように市来式は種々の手順を経て指宿式の影響を受け入れているが、このことは層位の関係でしめされる両者の、ある期間の共存関係からも想像されるところで指宿式の市来式に与えた影響は或る期間にわたって種々の径路で行なわれたものであろう。

市来式の分類

市来式土器に新旧二形式が認められることは、前にも示唆したが、本遺蹟に於ける貝層の発達状況を見ると、ⅠⅡⅢ層は貝層がよく発達し、貝殻も明瞭な形で残っているが、ⅣⅤ層は層の厚さも薄く、貝殻も粉末となって原形をとどめていない。

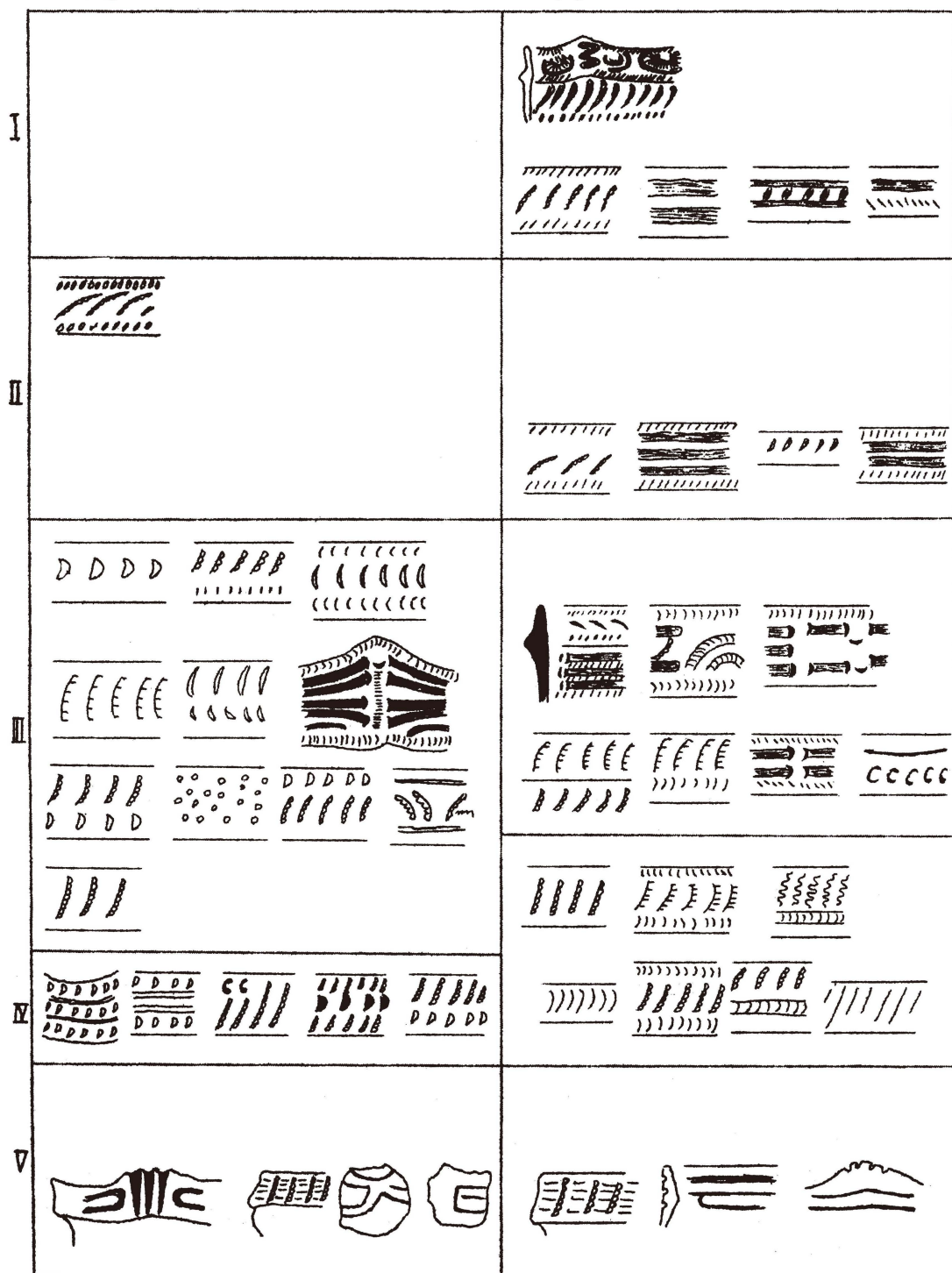
又第三群の土器は、第Ⅲ層から現われて来、指宿式もⅢ層に至って消えている。文様の点から見るとⅢ層以上に於ては凹線文が現われ、口縁部断面が第二表に示すごとく、断面形が三角形を示すものから「く」字形に変化したものが上層に至って数を増してくることが認められる。

上層部出土の土器には、文様が華麗になり文様帯におさまらず、あふれて、頸胴部に及ぶものが出て来る。これらのことはⅢ層とⅣ層との間を境として互に異なる要素を含んでいることを示すものである。

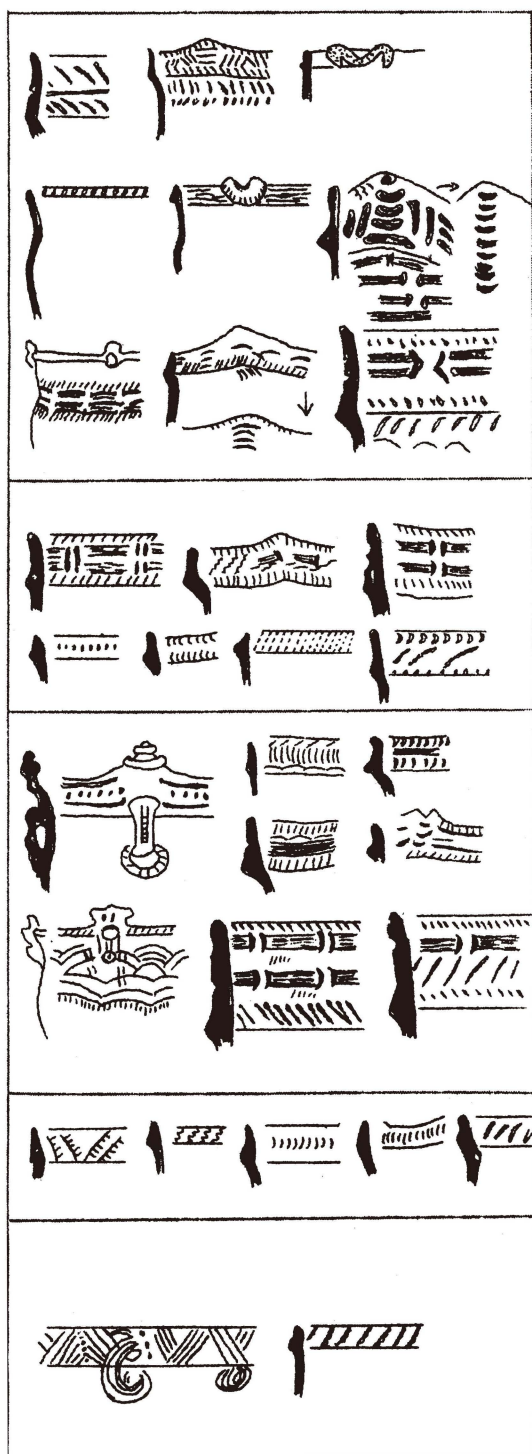
Fa

第十五 図

Fb



Fc



第二表

草野貝塚土器口縁部断面と層位との関係

断面 層位	断面 数	断面 %	断面 数	断面 %	断面 数	断面 %	断面 数	断面 %	断面 数	断面 %	断面 数	断面 %	断面 数	断面 %	断面 数	断面 %
Pa 層位	X		Y		Z		其他		Fb 区		X		Y		Z	
I									I	1	5	4	285	0	40	41
II									II	2	10	1	71	0	1	22
III									III	7	7	0	0	1	58	5.
IV									IV	35	50	0	10	10	100	14
V									V	3	15	2	14	0	10	56
VI									VI	7	0	0	0	3	0	0
AB	7	0	0	0	100					35	0	0	0	30	4	4
CD	4	29.2	2	18	0	0	0	0	IV	15	2	0	0	1	2	0
EF	4	29.2	45.5	1	100				III	7	7	0	0	1	5	8
G	5	35.7	4	36.3	0	0	0	0	IV	35	50	0	10	10	3	3
I									II	2	10	0	10	1	5	7
II									III	7	7	0	0	1	8	18
III									IV	35	50	0	10	10	5	8
IV									V	3	15	2	14	0	10	5
V									VI	7	0	0	0	3	0	0
VI										35	0	0	0	30	4	4
AB	7	0	0	0	100					35	0	0	0	30	4	4
CD	4	29.2	2	18	0	0	0	0	IV	15	2	0	0	1	2	0
EF	4	29.2	45.5	1	100				III	7	7	0	0	1	5	8
G	5	35.7	4	36.3	0	0	0	0	IV	35	50	0	10	10	3	3
I									II	2	10	0	10	1	5	7
II									III	7	7	0	0	1	8	18
III									IV	35	50	0	10	10	5	8
IV									V	3	15	2	14	0	10	5
V									VI	7	0	0	0	3	0	0
VI										35	0	0	0	30	4	4
AB	7	0	0	0	100					35	0	0	0	30	4	4
CD	4	29.2	2	18	0	0	0	0	IV	15	2	0	0	1	2	0
EF	4	29.2	45.5	1	100				III	7	7	0	0	1	5	8
G	5	35.7	4	36.3	0	0	0	0	IV	35	50	0	10	10	3	3
I									II	2	10	0	10	1	5	7
II									III	7	7	0	0	1	8	18
III									IV	35	50	0	10	10	5	8
IV									V	3	15	2	14	0	10	5
V									VI	7	0	0	0	3	0	0
VI										35	0	0	0	30	4	4
AB	7	0	0	0	100					35	0	0	0	30	4	4

X Y Z

Ⅳ・Ⅴ層の土器は貝殻文(市来式の特徴を示す)と平行曲線文(指宿式の特徴を示す)とが共存し、やがて融合して行った状態を示すものであるが、ⅢⅡⅠ層の土器は市来式文化の発展爛熟期を示すものであろう。第十五図Ⅲ層及Ⅰ層に現われる把手を有する土器で頸胴部にかけて凹弧文が施されその上下に刻線文を付したのものがあるが、この種土器は市来後期の土器とも言い得るもので、その特徴をよく現わして居り、形式的にも証明出来る要素を備えている。即ち、指宿式は平行曲線文を特徴とするが、漸次変化して平行直線文となり、渦文及結節部が点又は爪形として平行直線の始まりに使用されるようになることは前に示した。この平行直線文は市来式に受け継がれて、盛に行なわれたが、後期になると再び平行弧文化して行きさきの点及爪形文は全く形式的に施され、平行線の始まりにあったものが、凹線と凹線との間に形式化されて残るようになる。

かくてⅠⅡⅢ層の土器は、ⅣⅤ層の土器に比較して形式的にも後期の新しいものと言えるのである。

尚市来式と指宿式との関係について附言したいことは、指宿式に於て裏面の曲線文様が行なわれているが、市来式に於てもこれを受け継いで簡単化し山形隆起部の裏面に簡単な蛇行形曲線・ハート形・点等となって残されていることである。

第三群の土器は上層のみに現われるものであるが、これ等も貝殻条痕を有するものが相当数あり、又文様も市来式と同様に貝殻文又は爪形文・平行線文等を施して居るものがこれまた多量に見られる。

然しながら一面に於ては、無文の土器がこの形式に多く現われ、器形に於ても壺形、甕形等が出現し、口縁部も市来式の三角形断面の特徴が見られない。以上のごとく第三群の土器には一面には市来式の特質を示しその系統であることを示しながら他面又条痕等を失って行き、一面には後期の爛熟華麗の文様を含む反面また最も簡単化された形となり無文等をも多く含むようになり、単純化して行く傾向を示すものと思われる。

結 び

本遺蹟は貝塚としては小規模のものではあるが骨角器、石器等に見るべきものがあり、又土器に於ては市来式を主体とする遺蹟で此の形式に従来知られなかった台付の鉢形土器・皿形土器等を含み口縁部に把手を有するもの等もあって、多様性に富むことが明らかとなった。

層位の点に於てはその関係が明らかに認められ、市来式と指宿式との上下関係が判明し、又指宿式より市来式への形式的推移をたどることが出来、これはまた市来式自体を新旧に二分することを可能ならしめた。市来式は鐘崎式・西平式を伴出し、縄文後期と思われるが、第三群の土器を出土することは従来不明であった市来式以後の縄文土器が如何なるものであるかを推定するの便を与えるものであると思われる。

— 27. 3. 21 —